

うめがおか 3

1998 No. 130



東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方 「インド化」された国々へ 遺跡の旅-II

下馬部会 斎藤賢一

今回は寺院建築における彫刻についてお話しします。彫刻の題材はインド神話や叙事詩がもとになっています。インドの神は私たち日本人には、なじみにくいかもしれませんが、仏教（大乘仏教）に取り入れられて、仏教伝来とともに日本に入ってきた神もあります。吉祥天、弁財天、帝釈天、等はヒンドゥー教の神でした。インドの歴史を簡単に見てみますと、紀元前15～13世紀頃、遊牧民族のアーリア人がインド西北部に侵入してきました。それ以前からインド亜大陸には、農耕民族のドラヴィタ人などの先住民族が住んで、高度な都市文明を築いていました。アーリア人は先住民族を支配して、北インドに定住し始めました。アーリア人は自然現象の神格化を基本とする多神教と、最高位カーストのバラモンは半神の特権階級として、民の上に君臨するという厳格な身分制度（カースト）を持っていました。これに先住民族の土着信仰とが結びつき、バラモン教ができました。そして紀元前5～6世紀には、これらバラモンとバラモン至上の宗教に対して、批判的な人々がでてきます。釈迦（仏教）やヴァルダマーナ（ジャイナ教）たちです。またバラモン教の内部でも、改革の機運が高まり、バラモン教を土台にしてヒンドゥー教が誕生しました。以前のバラモン教の神は力を失い、ブラフマー、ヴィシュヌ、シヴァの三大神が現れます。

(写-1 中央がシヴァ神で左手に三叉戟を持っており、向かって左側はブラフマー神で四面四腕、右側の手に数珠、左側の手に蓮を持っています。右側はヴィシュヌ神で右側の手にチャクラを持っています。この寺院はシヴァ派の寺院ですのでシヴァが中央にありますが、ヴィシュヌ派の寺院であれば中央はヴィシュヌになりま



写真-1 「三大神」ワット・プー ラオス

す)

ブラフマー神は宇宙の創造を、ヴィシュヌ神は維持を、シヴァ神は新たなる創造のために宇宙を破壊するのです。ブラフマー神は抽象的なキャラクターのため、人々の支持を得られず、中世以降になると急速に勢力が衰えてしまいます。その後今日までヴィシュヌ神とシヴァ神を中心に発展してきました。ヒンドゥー教の神には配偶者である女神（シャクティ）がおり、乗り物（バーハナ）に乗っています。そして仏像と同じく手に色々な持ち物を持っていますので、持ち物と乗り物でだいたいどんな神であるかわかります。それでは彫刻の題材になる神を見てみましょう。

○ヴィシュヌ神

神 格：三大神の一人、宇宙の維持、四本の腕を持つ

持 物：円盤（チャクラ）、棍棒、法螺貝、睡蓮

仏教名：毘紐天（びちゅうてん）

神 妃：ラクシュミー

乗り物：ガルーダ（迦樓羅天）

ヴィシュヌ神は勢力を得るために化身という方

法をとって発展してきました。この化身とは当時の人気のある実在の人物や、物語の主人公に姿を変えて、地上に出現して世界救済をすることです。代表的なものとして、「乳海攪拌」の巨大な亀、「ラーマヤナ」のラーマ王子、クリシュナ、釈迦、巨大な猪、などです。東南アジアの寺院でよく用いられるモチーフはガルーダに乗るヴィシュヌ、「乳海攪拌」、「アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ」、などです。

「乳海攪拌」の物語

神々は不死の霊液アムリタ（甘露）を手に入れるにはどうすればよいか協議し、ヴィシュヌ神に相談したところ、マンダラ山を攪拌棒として大海をかき混ぜよと教えられた。そこで神々はアスラ（悪魔）たちとも協力することにして、マンダラ山を引き抜き、それにヴァースキ龍を巻き付け、両側から引っ張って回転させた。ところが、海の底に穴があき山が沈みそうになったため、ヴィシュヌ神は亀に姿を変えて海に潜り、甲羅でマンダラ山を支えた。やがて海の水は乳状に変じ、その中からさまざまな宝が現れてきた。最後にアムリタの壺が現れ、神々とアスラたちは争ってそれを飲もうとしたが、アスラの方が先に壺を奪ってしまった。それを見たヴィシュヌはモーヒニーという美しい女の姿に変じて取り返しにいった。アスラたちはその美しさにうたれ、アムリタの配分を彼女にまかせた。モーヒニーはアスラたちを幻惑し、神々だけにアムリタを飲ませた。こうして神々は不死となったのである。

（写-2中央にヴィシュヌがおりその下に化身の亀がマンダラ山を支えています。向かって左側でヴァースキ龍を引いているのがアスラ、右側は神々です。上部にはアプサラが舞っており、足の下は海になっており魚が彫刻されています）

「アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ」

宇宙創造神話

太古、全世界は混沌の海におおわれ、そこをアナンタ龍に横たわったヴィシュヌだけが漂っていた。やがて永遠に近い時間が流れた後、眠るヴィシュヌのへそから一本の蓮が生えてするす



写真-2 「乳海攪拌」

アンコール・ワット カンボジア

ると伸び、花が開くとそこに創造神ブラフマーが座っていた。ブラフマーは世界を造った。（写-3は6世紀のインドの寺院の祠堂壁面に彫られたものです。ヴィシュヌが9頭のアナンタ龍の上に横になり、ヴィシュヌのへそから出た蓮の上に乗っているのが4面のブラフマー神です。向かって右側にはナンディに乗るシヴァとウマー、左側にはアイラーヴァタに乗るインドラが見えます。ヴィシュヌの足下に座っているのはラクシュミーと思われます。写-4はカンボジアの寺院の破風に彫られたもので、へそから出ている蓮がよくわかります）

ヴィシュヌの化身のクリシュナはインドで最も広く知られ、親しまれている神で実在の人物とも言われています。様々なエピソードに富んだ



写真-3 「アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ」
ダシャヴァタラー インド



写真-4 「アナンタ龍の上に横たわるヴィシュヌ」
バンティアイ・サムレ カンボジア

クリシュナの生涯の物語は長く語りつがれその人気はクリシュナ教と呼んだ方が良いかもしれませんが。東南アジアの寺院に彫刻されるクリシュナの物語は「ゴヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ」、「カーリヤ竜を退治するクリシュナ」などがあります。

「ゴヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ」この地域の牛飼いたちは元来はインドラ神を崇拜していた。しかしクリシュナは犠牲祭の準備をしていた父ナンダに、それよりも自分たちが日頃最も恩恵を受けている牛と山とバラモンを祀るようにしようと提案した。犠牲祭が変更になったことを知ったインドラは激怒し、サンヴァルタカという雲に命じて牛飼いたちの村に大雨を降らせた。水がすべてを押し流しそうになり、人々が大いに恐れているのを見て、クリシュナはやおらゴヴァルダナ山を引き抜き、それを傘のように頭上にかざして、その下に牛や人を避難させた。雨がやむまでクリシュナはそうやって七日間山を支えていた。インドラは驚いて天から飛び降りてきて、自分が高慢だったことを詫び、クリシュナに敬意を表したのである。(写-5 カーラの台座の上に右手でゴヴァルダナ山を持ち上げているクリシュナが彫刻され、足下には牛飼いたちや、家畜が避難しています)

○ラクシュミー女神

神 格：幸運と豊饒の女神、ヴィシュヌの神妃、四本の腕を持つ

持 物：睡蓮



写真 5 「ゴヴァルダナ山を持ち上げるクリシュナ」
バン・プルアン タイ

仏教名：吉祥天

乗り物：睡蓮

ラクシュミーは幸運と繁栄の女神で、通常左右に立つ二頭の神象が頭上から聖水を降り注いでいる形(ガジャ・ラクシュミー)で寺院の入り口などに表されています。このガジャ・ラクシュミーはヒンドゥー教寺院だけではなく、仏教寺院にもよく表されています。

(写-6 楼門の入り口上部破風に彫刻されており、座位のラクシュミーの左右から鼻で聖水の入った壺を掲げた像は典型的な形です。ラクシュミーの下にガルーダがいるのはヴィシュヌの



写真-6 「ガジャ・ラクシュミー」
バンティアイ・スレイ カンボジア

乗り物だからです)

○シヴァ神

神 格：三大神の一人、宇宙の破壊、創造、三

眼を持つ

持物：三叉戟、棍棒、蛇

仏教名：大自在天、青頸

神妃：パールヴァティー、ウマー、ドゥルガー、カーリー

子供：ガネーシャ（大聖歓喜天）、スカンダ（韋駄天）

乗り物：ナンディ（牝牛）

ヴィシュヌ神が化身という方法によって勢力を広げたのに対して、シヴァ神は土着の信仰と結びついて発展してきました。シヴァ神は通常リングという男性器として崇拜され、ヨーニと呼ばれる女性器の台座とセットになって信仰されます。したがってシヴァ派の寺院の祠堂には、シヴァ神像はなく、リングが祀ってあります。東南アジアでよく見られる彫刻は、シヴァとパールヴァティー（ウマー）がナンディ（牝牛）の上に乗っているもの、ナタラージャと呼ばれるシヴァのダンス（破壊と創造を象徴する）など、またインドネシアのシヴァ派の祠堂では必ず入り口を除く三方にドゥルガー、ガネーシャ、リシ（尊師）の彫刻があります。

（写-7カーラの台座の上にウマーを膝の上に抱えてナンディに乗るシヴァが彫刻されています。写-8カーラの上に白鳥の台座があり、その上でシヴァが踊っています。その踊りを見ようと神々が集まっており、向かって右側には蓮に座するブラフマー、左側にはやはり蓮に座するヴィシュヌが彫刻されています。写-9インドの寺院正面の屋根の上に彫られたものです。円の中のシヴァは三叉戟などを持っており、体にはシンボルの蛇が巻き付いています。足下には退治された小鬼が見られます）

○パールヴァティー

神格：シヴァ神妃

持物：睡蓮

別名：ウマー、ドゥルガー、カーリー等

別名を持つと言うことは、異なった人格を持つことでパールヴァティー、ウマーが女性の穏やかな側面を、ドゥルガー、カーリーなどは陰惨で攻撃的な側面を表しています。シヴァ神妃の彫刻としては、ドゥルガーの「水牛の姿をした



写真-7「ナンディにのるシヴァとウマー」ムアン・タム タイ



写真-8「ナタラージャ」シーカラブーム タイ



写真-9「ナタラージャ」
ヴァイタル・デウル インド

アスラを殺すドゥルガー女神」が好んで彫刻されます。

「水牛の姿をしたアスラを殺すドゥルガー女神」かつてマヒシャというアスラが眷属を率いて

神々と戦い、勝利をおさめたことがあった。天界を追われた神々は、シヴァとヴィシュヌに助けを求めた。両神は大いに怒り、その怒りは光となって口から放出された。他の神々も怒りの光を放ち、そのすべてが合わさったところから一人の女神が生まれた。ドゥルガーの誕生である。神々は彼女にそれぞれの武器、つまりシヴァの三叉戟、ヴィシュヌの円盤、インドラの金剛杵などを与えた。ドゥルガーは恐ろしい叫び声をあげると、アスラたちと戦うために出発した。アスラ軍を殺しつくしたドゥルガーは、最後にマヒシャが水牛の姿に化けたときに殺すことに成功したのである。



写真-10 「水牛の姿をしたアスラを殺すドゥルガー」
バンティアイ・スレイ カンボジア



写真-11 「水牛の姿をしたアスラを殺すドゥルガー」
ヴァイタル・テウル インド

(写-10破風に彫られたもので、手に色々な神から与えられた武器を持ち、右側にはドゥルガ

一の乗り物である獅子が、左側には水牛の体の一部が見られます。写-11はインドの寺院の壁に彫られたものです。とてもダイナミックで水牛に化けたアスラに三叉戟を突き刺しているのがよくわかります)

○ガネーシャ

神格：象頭人身をした知恵と繁栄の神、シヴァの息子

持物：象を駆る棒、数珠、托鉢をする鉢など
仏教名：大聖歓喜天

乗り物：ネズミ

象の頭をしたガネーシャ神はインド全国で広く親しまれ、人気のある大衆神です。まるまると太った太鼓腹は富の神にふさわしく、たいがいの商店にはガネーシャの絵や像が掲げられています。ガネーシャの彫刻は東南アジアでもポピュラーです。

(写-12シヴァ派の祠堂の3面に彫刻されたもので左手に持った鉢のお菓子を食べています)

○ブラフマー

神格：三大神、宇宙創造神、四つの頭と四本の腕をもつ

持物：聖典、数珠、水壺など



写真-12 「ガネーシャ」
サンビサリ インドネシア

仏教名：梵天

乗り物：ハンサ鳥（鶯鳥、白鳥）

ブラフマーはヴィシュヌやシヴァに比べますと、多分に観念的、抽象的な神です。それは元

来、宇宙の根本原理とされるブラフマン（梵）という観念を男性神として人格化した人工的な神だからだと思われます。神話の中での地位は必ずしも高くはありません。神々の長老として尊敬され、何か事件が起きたときの相談役ではあるのですが、シヴァやヴィシュヌのような強大な力はなく、自分を中心とした独自の神話体系も持っていません。彫刻としてもシヴァ、ヴィシュヌとともに三神一体として、又「アナタ龍の上に横たわるヴィシュヌ」のヴィシュヌのへそから出た蓮の上に乗った形で表されブラフマー神単独で彫刻されることはほとんどありません。(写-1、3、4、8)

○インドラ神

神格：東方守護神、武勇神

持物：金剛杵（ヴァジュラ）

仏教名：帝釈天

乗り物：頭が三つある白象（アイラーヴァタ）
非常に古い神で以前は強大な権威をもっていました。シヴァ、ヴィシュヌの勢力が強くなるにしたがって方位神になりました。東南アジアではアイラーヴァタに乗るインドラというモチーフとして、正面入り口のまぐさによく彫刻されています。なぜならインドラは東を守る神で、東南アジアの特にカンボジアのクメール寺院は東を正面としているからです。

(写-13正面入り口の破風に彫刻されたもので、カーラの上の台座に頭が三つある象に乗ったインドラが、右手に金剛杵を持っている典型的な彫刻です)



写真-13「アイラーヴァタに乗るインドラ」
バンティアイ・スレイ カンボジア

東南アジアの寺院で私たちがよく見かける彫刻は以上の神が中心です。その他獣神、半神たちがおります。ナーガ（蛇、コブラ）は不死と生命力のシンボルでカンボジアの寺院のいたるところに見ることができます。カンボジアのクメール王朝の建国神話はインドの王と自国のナーガの娘の結婚が語られており、クメール王朝はナーガの王朝といってもよいぐらいです。



写真-14「ナーガ」
バンティアイ・サムレ
カンボジア



写真-15「キンナラ、キンナリー」
ロロ・ジョングラン インドネシア

(写-14寺院の中庭の手すりの彫刻でナーガの頭の数には5、7、9が一般的です) アプサラ（天女）もクメール寺院によく見られます。特にアンコールワット寺院やバイヨン寺院の柱の至る所で、微笑んでいます。(タイトルの写真参照) インドネシアの寺院ではキンナラ（人頭鳥身一男）キンナリー（人頭鳥身一女）がカル

パタールという聖樹と共に、祠堂の壁面に彫刻されています。

(写-15寺院の基壇に彫られたもので、中央に獅子、左右の聖樹の下に頭は人で体は鳥のキンナラ、キンナリーが彫刻されています)

東南アジアの寺院入り口の上部のまぐさに必ず彫刻されるモチーフとしてカーラとマカラがあります。カーラは時間、死を表す鬼の顔として日本の鬼瓦に似ており、マカラは空想上の魚でワニに似ている大海の守り神です。そして入り口左右のドアフレームにはドゥバラパーラ(仁王)と呼ばれる守門神が彫刻され、カーラによって天空、マカラによって大海、ドゥバラパーラによって地上のあらゆる悪が内部に入らないように守っています。

(写-16像を安置するために寺院の壁に空洞を造ったものを壁龕へきがみといい、その壁龕の上部にカーラが、下部の左右にマカラが彫刻されています)

そのほかインドには沢山の神がおり、ヒンドゥー教の人々はアイドルの様に各々自分の好きな神を拝んでいます。しかしこれらの神々の背後

には唯一絶対の最高者が存在し、すべての神はこの絶対最高者の色々な面を表していると考えられます。したがってどの神を信仰しようと結局は同じなのです。そういう観点から見れば一神教とも言えると思います。次回は今回お話しできなかった叙事詩についてお話ししたいと思います。



写真-16 「カーラ、マカラ」
ゴドゥン・ソング インドネシア